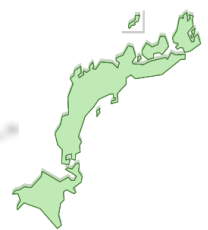




# まわりゆくお国ことば



「筆箱なおしてください」。大学進学を機に故郷の四国から関西にやって来た最初の年、テストの時間に先生にそう言われて、一瞬戸惑った記憶があります。そのとき初めて、関西では「なおす」に「しまう・片付ける」の意味があることを知りました。こんなふうに、その土地の人が何気なく使っている言葉が、他の地域の人には伝わらないということはよくあります。『東京のきつねが大阪でたぬきにばける 誤解されやすい方言小辞典』などにも多く取り上げられていますが、見知らぬ土地に行くと、言葉の違いが興味深くも感じますよね。というわけで今回紹介するのはお国ことば、つまり方言に関する本です。

その名も『全国アホ・バカ分布考 はるかなる言葉の旅路』。この本が生まれるきっかけとなったのは朝日放送のテレビ番組「探偵！ナイトスクープ」に視聴者から寄せられた「言い争う時に東京の人は『バカ』と言い、大阪の人は『アホ』と言う。『アホ』と『バカ』の境界線がどこにあるか調べてほしい。」という内容の依頼でした。はじめは西日本は「アホ」、東日本は「バカ」であり、その境界線を調べようというものだったのですが、どうも事はそう単純なものではないことが次第に明らかになっていきます。調査を進めていくうちに、東日本だけでなく九州などでも東京と同じように「バカ」が使われていることが判明したのです。

そこで番組のディレクターは「ご当地では、大阪で言う『アホ』、東京で言う『バカ』に当たる言葉はなんですか。」というアンケートを全国に送付し、調査を開始します。すると全国から多彩なお国ことばが回答され、そこに一つの法則が見出されます。それは「言葉が京都を中心に同心円状に広がっている」というものでした。つまり、京都から東に同じ距離だけ行った地域と西に同じ距離だけ行った地域では似た言葉が使われているということです。

例えば東北などでは「アホ」や「バカ」のことを「ホンズナス」と言うそうですが、京都から西に同じぐらい離れた九州には「ホガナイ」という言葉があるそうです。これらは両方とも平安時代頃の京都で使われていた「本地（ほんじ）なし」が元になっていると述べられています。「本地」とは「本来のあり方」のことで、「本地なし」とは「本来とは違った言動や振る舞い」のことになります。東北などでは、酔っ払っておかしな言動・振る舞いをしている人なども「ホンズナス」と言うそうです。「本地なし」は平安時代の京都から東西に向かって伝わりはじめ、形を変えつつ東北と九州で現代まで受け継がれてきたということです。

余談ですが「本地」とは日本史で習う「本地垂迹説」の「本地」だそうです。何のことだったか気になる人は教科書を開いてみましょう。

実は同じような研究をした人は過去にもいました。民話や妖怪の研究などで知られる民俗学者の柳田國男（1875～1962年）が1930年代にまとめた『蝸牛考』という本では、「蝸牛（カタツムリ）」のことを何と呼ぶかを全国で調査した結果、京都を中心として東西南北に等距離にある地域では同じ呼び方であることが多いとされています。「探偵！ナイトスクープ」の企画からはじまった調査は、この「方言圏論」と呼ばれる言語学の学説に「アホ」と「バカ」という別の角度からアプローチするものとなったのです。

全国には本当に多彩な方言があります。それらが、かつて都で使われていた言葉が受け継がれてきたものだとすると、私たちの普段の話し言葉の中に、歴史が生きているような気がしてきます。メディアの急激な発達などによって、話し言葉の共通語化が進んでいると言われてはいますが、歴史や文化を今に伝える全国各地の豊かな方言が、後世に受け継がれてほしいですね。

## 方言に関する本

- 『全国アホ・バカ分布考 はるかなる言葉の旅路』松本修著 太田出版 1993年
- 『東京のきつねが大阪でたぬきにばける 誤解されやすい方言小辞典』  
篠崎晃一著 三省堂 2017年
- 『蝸牛考』柳田國男著 岩波文庫 1980年(初出1930年)
- 『かんさい絵ことば辞典』ニシワキタダシ著 ピエブックス 2011年
- 『ひょうごの方言 暮らしに息づくふるさとの言葉』  
橘幸男編著 神戸新聞総合出版センター 2004年